

訓練教官座談会議事概要

ディスカッション① 「事故事例をもとに考える」

- ・1年7ヶ月ぶり、初めての空港、初めての機体という状況で、訓練生に対し事前に教官がデモフライトを見せるべきであったのではと考える。
- ・自社事例として教官の介入を「サジェスチョン」「アシスト」「オーダー」「テイクオーバー」の4段階に整理して実施している。
- ・訓練生の自主性を重んじるあまりテイクオーバーが遅れる傾向があったが、危険と判断したらアシストの段階から即座にテイクオーバーへ移行し、安全を優先すべき。
- ・短い滑走路での追い風着陸は、速度が増しノーズギアからの接地につながる危険性（スレッド）があり、教官と訓練生の間で十分なブリーフィングの実施が重要
- ・同様の着陸になった場合、最初のバウンドでゴーアラウンドさせるか、テイクオーバーして安全に着陸させるべき
- ・フライト単体だけでなく、そこに至るまでの訓練の組み立てが重要
- ・担当教官制は訓練生の癖や背景を理解する上でメリットがある。
- ・訓練生に任せようとしてテイクオーバーが遅れることがあり、教官の介入基準を標準化することが重要
- ・代理の教官が、訓練生の長い飛行間隔や技量をしっかり引き継がずに飛行させたことが大きな間違い
- ・久しぶりの実機訓練でいきなりタッチアンドゴーを行い、3回もバウンドしている時点で、その日の訓練は早すぎたと判断することもできたのではないか。
- ・大きな原因は、教官と訓練生の間で訓練科目の手順に対する相互理解が不十分だったことと考える。
- ・管制指示による焦りなど、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルの相互作用が事故につながったと考えられることから、CRMの理解や事前のブリーフィングが重要
- ・油圧をオフにする訓練中であり、通常の手順ではホバリングに移る前に油圧を戻し、再確認する必要があった。
- ・現象はダイナミックロールオーバーであり、適切な対処ができていれば事故は防げたはず
- ・有資格者同士で操縦訓練を実施すると相互の監視が低下するのではと考えられる。
- ・タッチアンドゴーをやらせたならば、一回目のバウンドした際にテイクオーバーすべき
- ・操縦を交代する際の「I have control.」「You have control.」のコールは、操作を引き渡す側が全ての操作を終えてから行うことが重要

ディスカッション② 「訓練教官が抱える課題やスキルアップについて考える」

- ・最近の課題として、訓練生が経験しにくい気象状況での飛行判断などを教えることは難しい
- ・訓練生は失敗を恐れる傾向があるため、「失敗してもいいから考えている通りにやってみよう」

と促すことが重要

- ・安全のためテイクオーバーが早まることで訓練生が経験を積む機会が減る一方、テイクオーバーの遅れがインシデントにつながる場合もあり、安全確保と訓練効果の両立が課題
- ・限られた時間内で多様な背景を持つ訓練生を教育する難しさがあり、限定変更訓練等では時間をかけられる反面、できない部分が浮き彫りになる
- ・飛行経験の少ない操縦士を短期間で養成が必要となるケースがある。
- ・限られたリソースで最大の教育効果を上げることが課題であり、教官個人の努力に任せがちなスキルアップについて、公的なセミナーなどの機会があればよい
- ・教官はまず自らが乗る飛行機の特性を把握することが第一
- ・訓練生にはデモ、アシスト、口頭指示、単独実施といった段階的な教育を心掛けている
- ・飛行前のブリーフィングでスレッドを抽出し共有することが単独飛行における離着陸の安全につながった成功事例がある
- ・教官の技量向上のための効果的な教官訓練の実施が重要（費用対効果含む）
- ・単独飛行にあたっては安全基準を教官がしっかり提示し、訓練生の能力をしっかりと確認した上で行う事が重要
- ・教官はあくまでサポート役であるという姿勢で指導にあたっている
- ・単独飛行を可とするかの判断は、訓練生の安全に関わるため、厳しく確認している。
- ・フライトレーダーや動画、高性能なFTD（飛行訓練装置）など、デジタル機材を活用した教育の機会が増えており、今後教官にはそうしたツールの活用が求められると考えている
- ・訓練環境や訓練生のモチベーションが大きく変化している中、教育のやり方も時代に合わせ変えていく必要がある
- ・ルールの形骸化を防ぐため業界を横断した課題共有の場を設けられると良い。
- ・デジタルツールによる個人学習が主流となる一方、「ハンガートーク」のような、教官で失敗談などを共有する機会が役に立ったことが多くある
- ・養成機関同士が情報交換できる、メーリングリスト、ハンガートークのようなコミュニティがあると良いと考える。
- ・訓練生の気質が変わっても、養成機関側は決して判定基準や教育レベルを下げてはならず、教官が判定権を持つことを再認識する必要がある